

## まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室  
助教授 榎田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

WWW サイト (本冊子の PDF ファイル公開中)

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>

### 1.

この報告書は、その主要部分においては、『義肢と装具』および『(義肢と装具を用いた人間に関わる) 相互行為』に関連してなされた1年間の相互行為分析をまとめたものである(「調査実習」以外としては、卒論を元にした論文として吉野秀紀君の作品を第Ⅲ部に掲載している)。研究は2004年度徳島大学総合科学部開講科目「地域調査実習」(5年生以上は、「社会調査実習」)の一環として行われた。授業の履修登録者は、「社会調査実習」としての履修者が1名、3年次生が3名、2年次生が1名の計5名であった。調査には、義肢装具の制作工房である「Y 義肢製作所」、義肢装具装着者の生活および仕事の場である「Z園」、および多数の個人の方から全面的な支援を受けた。調査地秘匿のため、長時間のインタビューに答えてくれた個人の方や撮影に応じてくれた施設内居住の方々のお名前をここに挙げるができないのは、心苦しいけれども、記して感謝したい。

今回のテーマ『義肢・装具の相互行為分析』は、指導教員の榎田としては、満を持しての企画であった。我々が調査対象地としたA県T市は、全国でも有数の『義肢装具』の制作工房集積地であり、会社の専務取締役の方は、日本義肢装具士協会の理事をしていらっしやう。また、榎田は平成16年度から、徳島県の「ユニバーサルデザイン基本指針検討会議」委員(専門委員を兼ねる)をしており、義肢や装具に関連した最新の動向に関する情報を得やすい立場であった。もちろん、エスノメソロジーという方法が、「自分の身体でないものが自分の身体である」というこの「義肢・装具」の特徴を探究するのに好的であろう、という確信があったことがこのテーマに期待した最大の理由であった。そういう背景の中で、実習の当初は、「Y 義肢製作所」関連データを丁寧に集めることで実習を成功させることができると見込んでいた。

けれども、このもくろみは失敗におわった。理由は以下の2点である。①「患者様(あるいは、ユーザー様)」のビデオ撮影に関して、工房側からアクセスする方策では、なかなか医療関係者のかたがたからの調査企画への承諾が頂けなかった。「患者様」側からアクセスするよう考えるべきであった。②「義肢・装具」の調整作業が、「義肢・装具」の更新時に関してはかなりルーティン化しており、データとしておもしろいと思われた「最初の義肢・装具の制作時点」に関しては、未成年者の場合が多いことから、その実際的に調査可能なケースがひどく少なく、調査日程との調整付けが困難であった。これら2点から、2004年7月の時点で、調査のメインターゲットを、「施設内におけるユーザーの使い方」に変更することとした。この変更は、大変大きな変更で、実習生諸君には、見通しの立たない数週間を過ごさせたことを申し訳なく思う。しかし、彼らはおどろくべき切り替え能力の高さとがんばりでこの変更を成功裏に実践した。本報告書が曲がりなりにも「学術的な水準」が存在するものになっているとすれば、それは、指導教員の見通しの甘さにもかかわらずさいごまでついてきてくれた学生諸君の努力と資質の高さによるものであるといえよう。

なお、今年の学生に関しては、もう一点強くほめておかなければならないことがある。それは、私の調査実習でははじめて「論文」の「個人執筆」をしたことである。上に記したように今年の実習生は5人と少なく、従来のような班分けシステムをとることができなかった。これまで、「(2、3年次における)調査実習では班による合作、(4年次における)卒論では個人研究」という発展システムで指導を行っていたのだが、今年は(さい

ごまで迷ったけれども)最終的に「個人執筆」路線を採用した。榎田の指導が少し多めに入っているということはあるかも知れないが、どれも十分な水準の作品となっているように思う。大変だけれども実力が付く程度はこちらの方が高いようだ。次回の実習でもできればこの「個人執筆」システムを採用していきたい。

今年も多数の学外者の支援によって『実習』運営が行われた。国際医療福祉大学の阿部智恵子氏、国際基督教大学の岡田光弘氏には、夏休み等に学生の発表を聞いてもらい指導を賜った。記して感謝したい。また、神戸大学大学院経営学研究科博士課程在学中の田村直樹氏には、2005年1月7日～8日の小豆島合宿にまでご同行頂いた。田村氏のざっくばらんな性格は、執筆に行き詰まり暗くなりがちな学生の気持ちをほぐす意味でたいへん有効であったと思う。特別の感謝を捧げたい。なお、研究室の業務を一手に取り仕切ってくれている瀬尾かおり氏への謝辞も怠ることはできない。彼女の機転と手際の良さで調査地における業務の混乱がなんども救われた。続けてお世話になり続けたいと思っている。

## 2.

さて、残りの紙幅で、本冊所収の諸論文等について簡単な解説をしていきたい。

まず、今回の編集方針を述べよう。調査実習報告書の価値は、その掲載論文の学術的価値もさることながら、全国の同業の教員が実習を実施するに当たっての資料としての価値にも大きなものがある。第Ⅳ部掲載の諸原稿はこの目的に資するよう編集されたものである。第Ⅳ部第1章は、一人称一人語り形式のインタビュー記録であり、学生の感想が末尾に掲載されていることにより、学生が対象者の「語り」のリアリティに迫るプロセスが見て取れるようになっている。つけられた「タイトル」の工夫も見逃せない。第Ⅳ部第2章は、調査の実際に関わる諸原稿であり、調査依頼状・礼状等はかなりの程度そのまま流用して他の実習にも使えるものになっているのではないだろうか。

第Ⅲ部掲載の卒業研究「音を取り巻く相互行為分析ーギター教授演奏場面を事例としてー」(短縮版)は、本学の学生のエスノメソドロジー研究の弱みである、「先行研究のレビューが甘い」という問題を苦闘しながら乗り越えようとしたものである。このシュツをめぐる苦闘はおおむね成果をあげているのではないだろうか。味わって頂きたい。

ついで、第Ⅱ部の各論文の簡単な解説を書いておこう。第Ⅱ部の各章のタイトルを見て頂くとわかるように、第2章「道具の非道具的利用ーことばやものが実際に使われている様子の研究ー」(原田・正島・榎田論文)以外は、基本的に「動作」を「画像分析」の方法で扱っている。このような傾向は、撮影分析機材の高度化を遠因にして、世界のエスノメソドロジー全体の研究動向となっているが、その最新動向と我々の研究が相即していることをここから見て取ることができよう。残念なことに動画データの「LANハードディスク」による社会調査室内各クライアント・パソコンへの配信システムの構築には失敗し、学生には苦勞をかけたが、個別パソコンのハードディスクを活用して掲載された多数の写真が、これら諸章の分析を分かりやすいものになっているのではないだろうか。

以下、章番号順に解説をする。

第1章「食堂の中の交差点ー車いすのエスノメソドロジー2ー」(林論文)は、あの名作(日本のデータを扱ったエスノメソドロジー研究の中でとりわけ優れたものだとおもう)「相互行為におけるコミュニケーションと権力ー車いす使用者>のエスノメソドロジー研究ー」[山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正、1993→1997]の続編として位置づけることが可能な研究であると思う。ひとは90センチの幅があればすれ違えることができるが、車いすではそれは困難である。このような「車いす」の「特質」に基づいて、施設内の食堂に「交差点」が出現することになる。山崎らの論文においては、「介助者」を伴うという「車いす」の「特質」が解析されたが、本論文においては、「車いす」に乗っていることに伴う、

「食堂内通路の交差点化」現象が解析されているのである。私には、これは驚くべき成果であると思われた。なお、本論文の前半では、調査対象地である「Z園」に関する概説が書かれている。後続の論文を読む際にも参照して頂ければ幸いである。

第2章「道具の非道具的利用—ことばやものが実際に使われている様子の研究—」（原田・正島・榎田論文）は、本論部分を原田が、補論部分を正島が執筆し、論文全体の前書き部分を榎田が執筆した。実質的に原田の論文である。論文のねらいは榎田の前書きにあるとおり、“「ことば」の非辞書的利用”および“「杖」の非活用マニュアル的利用”の相同性に注目し、それを「会話分析」（原田執筆部分）および「ビデオ分析」（正島部分）の手法で検討したものである。本論と補論のこのような組み合わせ的編成が可能なこと背景には、「（ことばやものの）社会的意味」を探究するという通底した問題関心が社会学とエスノメソドロジーとの間にあるということが存在するのであり、したがって、ここにおいて、エスノメソドロジーが真性な社会学でありうることが証明（あるいは、例示）されているのだ、と私は思っている。

この1章と2章のいささか原論的な主張に比べれば、以下の諸章（3～5章）は、比較的応用的・実地的な内容を持っているといえよう。

第3章「職場のエスノメソドロジー」（正島論文）は、「大見さん（仮名）」の職場内相互行為を分析したものである。本年の実習では年度の前半に好井・山田・西阪編『会話分析への招待』、山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』をテキストとして用い、年度の後半には上野直樹『仕事の中での学習』ほかを教科書として用いた。本論文にはこの後期の上野の著書の影響が見て取れよう（文献表にはあがっていないけれども）。作業場での業務は毎日くもくとして行われ、音声を用いた分析が困難であった。その中で、ぎりぎりいえることを言っている（F陣形への言及など）ように思われる。

第4章「ある入所者の一日の活動を追って」（田中論文）は、「北川さん（仮名）」の活動を朝から夜まで追うなかで、議論を進めた論文である。朝の体調不良という「イレギュラリティ」がどのように「施設内の日常」として、「施設内の日常」の中に埋め込まれて、「生きられているか」、を証している、という観点がこの論文を評価する第一の観点であろう。なお、そのような視点もさることながら、本論文の後半における、「軽作業場」での「雑誌付録の袋づめ作業」における「紙をV字において他の付録素材を持ち上げる」メカニズムの解明は、「ビデオ分析」の面目躍如であるといえよう。このような「技術（テクニック、道具の非道具的利用＝第Ⅱ部第2章参照＝）」は、ただ現場にいて参与観察する中では理解・把握することができなかつた内容であった。研究室に戻ってきた後、繰り返しビデオを見ることで、そういう地道な研究実践の中から、紡ぎ出された論考であるといえよう。

さいごに、第5章「戸を閉めることのアフォーダンス」（佐々木論文）は、「戸を閉めること」に注目しながら、ひとが繰り返し行為することの中に「秩序」を発見しようとした研究である。「振る舞い」の秩序を「意図」や「意志」に還元する（常識的）「理解」と微妙なバランスを取りながら、研究が進められている。いささか「生煮え」風の論文になっているが、「こういう研究はおもしろい」と著者が感じ始めていることがよく分かる論文であり、こういう論文が掲載されていることも『実習報告書』の価値であろう。なお、末尾におけるジンメル『橋と扉』への言及は、「エスノメソドロジーとジンメルの関係の吟味」という我が国でいまだ未達成の研究課題のとば口を切り開くものとして評価できるのではないだろうか。

※ 本研究の一部（榎田が関わった相互行為分析部分等）は、文部科学省科学研究費補助金「医学教育のエスノメソドロジー」（平成16年度基盤研究（B）（2）：研究代表者、榎田美雄）の一部として実施された。